

保育実用図書に示された3歳未満児の遊びについての考察 — 保育所保育指針2008年改定前後の コンテンツの比較から —

A Study on Form of Playing under 3years old Shown in the Books for Nursery Teachers Comparison to the Contents Shown Before 2007 to After 2008

西村 真実¹
Nishimura Mami

本稿は、保育者向けに出版された3歳未満児の遊びをテーマとする保育図書のコンテンツを分析し、考察を試みたものである。保育者と子どもが遊びに関与する形態やその主導権の所在から分類を行い、さらに改定版保育所保育指針改定の前後で2群間の比較を行った。その結果、1歳、2歳を対象とした遊びで複数のカテゴリーで顕著な差が認められた。保育所保育指針改定後の図書に示された遊びは、改定前に比べて集団志向と保育者主導のものが増加し、個人遊びや子ども主導の遊びが減少する傾向にあった。

はじめに

近年の子どもや子育てを取り巻く状況の変化に伴って、保育所に求められる役割は多様化・複雑化し、保育士にはより高度な専門性が求められている。こうした背景のもと、厚生労働省は保育士のキャリアパスに係る研修体制等の構築に着手し、2017年には保育士等キャリアアップ研修ガイドラインを策定した。現在、保育実践の質の向上に向けた取り組みが進められている。

2008年公布の保育所保育指針では、保育の質の向上を目指しつつも保育士の研修については「自己研鑽」という文言と共に努力義務として示された。従来、保育士の「自己研鑽」の教材として用いられてきたものの1つとして、保育図書が挙げられる。保育図書は多種多様に出版されているが、保育実践に活用できるものとして0歳から5歳までの各年齢に応じた「子どもの遊び」に関する図書は、とりわけ数多く出版されている。保育士からは実用的な図書としておおむね好評を得ているようである。しかし、そうした保育図書のコンテンツは、研究対象として扱われているわけではない。

そこで「保育図書」をキーワードにCiNiiで検索をかけたところ、ヒットした論文は3本であった。その中の1本は出版社による販売促進手法に関するもの¹⁾、もう1本は幼児の活動援助の視点から保育図書について論じられたもの²⁾、残りの1本は拙著であり保育図書に示された3歳未満児の遊びの様相について明らかにしたもの³⁾である。

ここでは、保育者の自己研鑽のためのツールとして保育図書を捉える。現行の保育所保育指針が公布されるまでの保育図書を対象とし、2008年の保育所保育指針改定を境としてコンテンツの示され方に着目した。これらの図書に示された子どもの遊びと保育士

¹ 帝塚山大学 教育学部 准教授

の関与の形態を軸として分析を行った。

1. 本研究の目的

本研究では、3歳未満児の遊びに関する図書のコンテンツに焦点を当てる。2008年の保育所保育指針改定を境として、図書に提示された3歳未満児の遊びの様相の変容を明らかにし、考察を進めることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 対象図書の抽出

保育者を対象に市販されている3歳未満児の遊びをテーマとする保育図書のうち、より確実に保育者に利用されているものを抽出するため、版を重ねているものを中心に、複数の大型書店ホームページに店頭在庫の確認ができたもので購入可能なものを15冊入手した。なお、入手した図書には、0歳1歳2歳でシリーズになっているものが4組あった。15冊の概要は表1のとおりである。

表1 対象図書一覧

	出版社名	図書ID	事例数	対象年齢	発行年月
1	A	A-1	48	0.1.2歳	1996.6
2	B	B-1	132	0.1.2歳	2007.1
3	C	C-1	97	0歳	2007.4
4	C	C-2	80	1歳	2007.4
5	C	C-3	69	2歳	2007.4
6	B	B-2	114	0歳	2008.5
7	B	B-3	121	1歳	2008.5
8	B	B-4	120	2歳	2008.5
9	D	D-1	78	0.1.2歳	2009.2
10	E	E-1	80	1歳	2010.2
11	E	E-2	73	2歳	2010.2
12	E	E-3	53	0歳	2011.3
13	F	F-1	75	0.1.2歳	2015.3
14	G	G-1	72	0.1歳	2016.2
15	G	G-3	69	2歳	2016.2
事例総数			1281		

(2) 手続き

入手した図書の出版年から、前回の保育所保育指針が施行された2009年3月を区切りとし、出版が2008年以前のものとして2009年以降のものに分別した。2008年までに出版されたものは8冊、2009年以降に出版されたものは7冊である。そして、各図書に紹介されている遊びを、次の3点に着目し、類別した。1つめが対象となる子どもの年齢である。

3歳未満を1年ごとに区切り、0歳、1歳、2歳とした。掲載された遊びに明記された対象年齢が、1-2歳というように2つの年齢を対象としている場合は、どちらの年齢でも分析対象とした。図書に示された遊びの総数と分析対象数が異なるのは、この重複のためである。分析対象数は表2に示す。

表 2 分析対象事例数

年齢	～2008	2009～	計
0歳	318	162	480
1歳	314	215	529
2歳	251	218	469
計	883	595	1478

次に、紹介されている遊びの主導権の所在が大人にあるか、子どもにあるかで判別し、大人が主導するものを「大人主導」、子どもが主導するものを「子ども主導」とした。「大人主導」の遊びの一例としては、次のものが挙げられる。保育者は、複数の子どもと対面で座っている。そして保育者が持ったペープサートに、穴の開いた布を被せ、ペープサートを動かしながら、「これは誰かな」と子どもに問いかけ、子どもが応える、というものである。これは、大人の主導なしには成立しない遊びである。

「子ども主導」は、牛乳パックと段ボールで作られた「押し車」に子どもがお気に入りのおもちゃ等に乗せ、思い思いに押して動かすことを楽しむ遊びが挙げられる。こちらは子どもの興味関心を端緒とし、子どもの自主的な働きかけによって成立する。遊びに大人が存在する場合でも、主導権が子どもにあり、保育者が子どもの遊びを見守り必要に応じて関与するものは「子ども主導」と判断した。

そして3つめが遊びの形態である。分析対象となった遊びはすべてイラストで示されていたため、ここではそれぞれの遊びを説明するイラストにも着目した。このイラストで2人以上の子どもが同じ遊びに興じる姿が描かれているものは「集団志向」、子どもが1名で遊ぶ姿が示されているものは「個人遊び」と判別した。

大人と子どもが1対1で行うわらべ歌遊びやふれあい遊びなどの遊びは、これらの主導権や形態に属さないものとして「大人子ども1:1」というカテゴリーを設定した。こうした遊びは大人主導と判断できなくもないが、子ども自身の興味関心を伴う参画が不可欠であり、大人の一方向的な主導や関与だけでは成立しないものであるため、独立したカテゴリーを設けた。

分析対象となった遊び一つ一つを精査すると、集団志向で図示されている遊びでも本質的には一人遊びであるものや、一人遊びの集合ともいえる平行遊びであるものも散見された。ここでは図書中のイラストが示す遊び方を重視し、実質は一人遊びや平行遊びであっても遊びが集団で行われるように描かれているものは「集団志向」と判断した。その結果、「大人主導で集団志向」「大人主導で個人遊び」「子ども主導で集団志向」、「子ども主導で個人遊び」、「大人子ども1:1」という5つのカテゴリーが設定された。

【作業定義】

5つのカテゴリーの作業定義は次のとおりである。

「大人主導で集団志向」とは、大人が主導する遊びに2人以上の子どもが参加している様子が描かれているものである。一例をあげると、2人の保育者が両端を持つ布の下に複数の子どもがおり、保育者らが揺らす布の下を子どもが出入りするものである。

「大人主導で個人遊び」は、保育者の主導のもとに子どもが一人で行う遊びである。一例をあげると、フェルトで作ったチョウチョウをつけた洗濯ばさみを保育者が「チョウチョウさんが来たよ」と言いながら子どもの衣服に止め、「がんばれー」などと言葉がけ

して子どもに洗濯ばさみを外すよう促し、子どもが自分で洗濯ばさみを引っ張って外す、というものである。保育者が主導する遊びを子どもが一人で行うものといえる。

「子ども主導で集団遊志向」は、遊びの主導権が子どもにあるもので複数の子どもが同じ遊びを一緒に行うことが図示されているものである。たとえば、ビニールプールの中で水面を叩いたり、スポンジなどを捕まえたりすることを楽しんでいる複数の子どもが描かれているものである。

「子ども主導で個人遊び」は、遊びの主導権が子どもにあり、子どもが一人で遊ぶ様子が描かれているものである。一例をあげると、ボードにひもを通しその両端につけたペットボトルのふたを子どもが引っ張って遊ぶ、というものがある。これは、子どもの興味関心を端緒とし、一人で楽しむ遊びであり、正に「一人遊び」である。

「大人子ども 1:1」は大人と子どもが 1:1 で行うふれあい遊びやわらべ歌遊びである。

3. 結果

(1) 全体

分類の結果は以下のとおりである。遊びの形態として最も多く示されていたものは、「大人主導で集団志向」のもので 35.3%を占めた。次が「大人子ども 1:1」で 20.1%であった。「大人主導で個人遊び」が 17.1%、「子ども主導で集団志向」が 14.4%で続き、最も少なかったものは「子ども主導で個人遊び」の 13.2%であった。(表 3)

表 3 年齢ごとの遊び形態

	0歳		1歳		2歳		総数	
大人主導で集団志向	87	18.1	192	36.3	243	51.9	522	35.3
大人主導で個人遊び	84	17.5	89	16.8	79	16.9	252	17.1
子ども主導で集団志向	65	13.5	81	15.3	66	14.1	212	14.4
子ども主導で個人遊び	61	12.7	81	15.3	53	11.3	195	13.2
大人子ども1:1	183	38.1	86	16.3	28	5.8	297	20.1
総数	480	100.0	529	100.0	469	100.0	1478	100.1

年齢ごとに見ると、0歳児で最も多いものは「大人子ども 1:1」の 38.1%であった。次が「大人主導で集団志向」の 18.1%、そして「大人主導で個人遊び」が 17.5%、さらに「子ども主導で集団志向」13.5%と続いた。0歳児で最も少ないものは「子ども主導での個人遊び」で 12.7%であった。

1歳児を見ると、最も多いものが「大人主導で集団志向」の 36.3%であった。次が「大人主導で個人遊び」16.8%、そして「大人子ども 1:1」16.3%と続いた。「子ども主導で集団志向」、「子ども主導で個人遊び」はともに 15.3%で最も少なかった。最多の「大人主導で集団志向」以外は、差はごく僅かで、4つのカテゴリーはほぼ同率であった。

2歳児では「大人主導で集団志向」が最多で 51.9%、次が「大人主導で個人遊び」16.9%であった。そして「子ども主導で集団志向」14.1%、「子ども主導で個人遊び」11.3%が続き、最も少ないものは「大人子ども 1:1」で 5.8%であった。

以上の結果を主導権の所在（大人・子ども）で括り、年齢ごとに比較した結果は以下のとおりである。(表 4)

大人主導の遊びは、0歳児で 35.6%、1歳児で 53.1%、2歳児で 68.8%であった。大人主導の遊びは子どもの年齢が大きくなるに伴って増加した。子ども主導の遊びを見る

表 4 遊びの主導権と子どもの年齢

	0歳		1歳		2歳		総数	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
大人主導	171	35.6	281	53.1	322	68.8	774	52.4
子ども主導	126	26.3	162	30.6	119	25.4	407	27.6
大人子ども1:1	183	38.1	86	16.3	28	5.8	297	20.1
総数	480	100.0	529	100.0	469	100.0	1478	100.1

と、0歳児 26.3%、1歳児 30.6%、2歳児 25.4%で、2割半ばかりから3割の間を推移する結果となった。大人子ども1:1を見ると、0歳児 38.1%、1歳児 16.3%、2歳児 5.8%であり、子どもの年齢が上がるにつれてこの型の遊びの割合は減少した。

遊びの形態を集団・個人で括り、各年齢で比較した結果を表5に示した。(表5)

表 5 遊びの形態と子どもの年齢

	0歳		1歳		2歳		総数	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
集団志向	152	31.7	273	51.6	309	66.0	734	49.7
個人遊び	145	30.2	170	32.1	132	28.2	447	30.3
大人子ども1:1	183	38.1	86	16.3	28	5.8	297	20.1
総数	480	100.0	529	100.0	469	100.0	1478	100.1

集団志向型の遊びは、0歳児で31.7%、1歳児で51.6%、2歳児で66.0%であり、子どもの年齢が上がるにつれて、その割合も増加することが見て取れた。個人遊び型の方は、0歳児30.2%、1歳児32.1%、2歳児28.2%であり、3割前後で推移した。大人子ども1:1の型では、0歳児38.1%、1歳児16.3%、2歳児5.8%であった。子どもの年齢が上がるにつれて、この型の遊びが減少することが見て取れた。

(2) 保育所保育指針改定前後での比較

先の結果を現行の保育所保育指針改訂版が施行された2008年5月を区切りとして、改訂前後で分割し年齢ごとに各カテゴリーの占める割合の比較を行った。さらに、これらの数値に対して2×5のχ²乗検定を行い、有意差が現れたカテゴリーの調整済み残差を確認し、差の内容を検討した。結果を表6に示す。

表 6 保育所保育指針改定前後における各年齢の遊びの主導権および形態

	0歳		1歳		2歳	
	n=318	n=162	n=314	n=215	n=251	n=218
	~2008	2009~	~2008	2009~	~2008	2009~
大人主導で集団志向	17.0	20.4	29.6	46.0	39.0	66.5
大人主導で個人遊び	19.2	14.2	20.7	11.2	24.7	7.8
子ども主導で集団志向	15.7	9.3	14.0	17.2	17.9	9.6
子ども主導で個人遊び	12.9	12.3	19.1	9.8	16.7	5.0
大人子ども1:1	35.2	43.8	16.6	15.8	1.6	11.0
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

0歳では、「大人主導で集団志向」の改定前は17.0%、改定後が20.4%であった。「大人主導で個人遊び」では、改訂前が19.2%、改定後が14.2%、「子ども主導で集団志向」

が改訂前 15.7%、改定後は 9.3%であった。「子ども主導で個人遊び」は、改訂前が 12.9%、改定後が 12.3%、「大人子ども 1:1」は改訂前が 35.2%、改定後が 43.8%であった。どの年代でも、「大人子ども 1:1」は最も割合が高く、その他 4つのカテゴリーの割合は 1割から 2割程度となっていた。

これらの数値に対して 2×5 の χ^2 乗検定を行った結果、すべてのカテゴリーにおいて有意差は認められなかった。どのカテゴリーでも増減があるものの、それらは顕著な差とは言いきれぬものではないという結果を得た。

1歳では、「大人主導で集団志向」の改定前は 29.6%、改定後が 46.0%であった。「大人主導で個人遊び」は、改訂前が 20.7%、改定後が 11.2%で、「子ども主導で集団遊び」を見ると改訂前が 14.0%、改定後が 17.2%であった。「子ども主導で個人遊び」は、改訂前が 19.1%、改定後が 9.8%、「大人子ども 1:1」を見ると改訂前が 16.6%、改定後が 15.8%であった。1歳では、どちらの年代でも「大人主導で集団志向」が最も高い割合を示した。個人遊びを含むと、大人主導の遊びが 5割を超えた。「子ども主導」で括って見ると、改訂前は 33.1%、改定後は 27.0%となり改定後の減少傾向が窺える結果となった。どちらの年代でも割合が最も高いのは、「大人主導で集団志向」であった。

さらに、これらの数値に対して 2×5 の χ^2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた。調整済み残差から「大人主導で集団志向」、「大人主導で個人遊び」および「子ども主導で個人遊び」に顕著な差が認められた。1歳では、「大人主導で集団志向」は改訂前よりも改定後は明らかに高い結果となり、「大人主導で個人遊び」は改訂前よりも改定後は明らかに低く、同様に「子ども主導で個人遊び」も改定後が明らかに低い結果となった。また、「個人遊び」を含む 2つのカテゴリーが同様の結果を示すことから、「個人遊び」については改訂前よりも改定後が顕著に少ないことが明らかになった。

2歳では、「大人主導で集団志向」の改定前が 39.0%、改定後が 66.5%であった。「大人主導で個人遊び」では、改訂前が 24.7%、改定後が 7.8%であった。「子ども主導で集団志向」は改訂前が 17.9%、改定後が 9.6%、「子ども主導で個人遊び」は改訂前が 16.7%、改定後が 5.0%であった。「大人子ども 1:1」を見ると、改訂前が 1.6%、改定後が 11.0%であった。どちらの年代でも割合が最も高いのは、「大人主導で集団志向」であった。

さらに、これらの数値に対して 2×5 の χ^2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた。つまり、2歳では「大人主導で集団志向」は、改訂前よりも改定後が顕著に高く、「大人主導で個人遊び」は改訂前よりも改定後が明らかに低い。これらは 1歳でも同様の傾向が認められた。「子ども主導で集団志向」および「子ども主導で個人遊び」は、改訂前よりも改定後が顕著に低いことが明らかになった。また、「子ども主導で個人遊び」は 1歳でも同様の傾向が認められた。「大人子ども 1:1」では、改訂前よりも改定後が明らかに高い結果となった。さらに「個人遊び」に属する 2つのカテゴリーと「子ども主導」に属する 2つのカテゴリーで、改訂前よりも改定後が明らかに低いという結果となった。

以上の結果から、特に 1歳と 2歳では、保育所保育指針改定前後で「大人主導で集団志向」が顕著な増加傾向、「大人主導で個人遊び」と「子ども主導で個人遊び」では顕著な減少傾向、が認められた。また、2歳でのみ「子ども主導で集団志向」が顕著に減少し、「大人子ども 1:1」では顕著な増加傾向が認められた。

4. 考察

(1) 保育所保育指針が示す3歳未満児の遊びと遊び図書コンテンツ

保育図書に示されている遊びは、1歳・2歳では保育所保育指針改定前・改定後ともに「大人主導で集団志向」が5つの類型の中で最も多い。また、改定後は改訂前よりも顕著な増加が認められた。1歳・2歳の遊びは、特に改定後、1歳では全体の半数近く、2歳では全体の7割近くが「大人主導で集団志向」となった。

1999年施行保育所保育指針を見ると、「第4章6か月から1歳3か月未満児の保育の内容」には、5配慮事項(13)において遊びに関する言及がある。そこには「子どもが興味を持ち、自分からしてみようとする意欲を大切にし、あたたかく見守る。」と明記されている。子どもの意欲を重視し、遊びを子どもの主体的な活動として捉える。「第5章1歳3か月から2歳未満児の保育の内容」では、4内容の中で(15)に「好きな玩具や遊具、自然物に自分から関わり、十分に遊ぶ」、(17)に「興味ある絵本を保育士と一緒に見ながら、簡単な言葉の繰り返しや模倣をしたりして遊ぶ」(18)に「保育士と一緒に歌ったり簡単な手遊びをしたり、また、体を動かしたりして遊ぶ。」など、子どもの遊びに関する項目が挙げられている。配慮事項には(10)に「子どもが興味を持ち、自分から遊びを楽しめるように配慮する」、(11)に「子どもの自発的な活動を大切にしながら、ときには保育士がやって見せるなど保育士と一緒に楽しんで遊べるようにする」と明記されている。6か月から1歳3か月未満児では、子どもの自主的・主体的な遊びへの関与を重視し、保育士の行う援助は側面的なものとして示されている。また、ここまで子どもの遊びを集団で行うものとして扱う記載は見られない。

「第6章2歳児の保育の内容」には、3ねらい(7)に「身の回りに様々な人がいることを知り、徐々に友だちとかかわって遊ぶ楽しさを味わう」とある。4内容には(7)に「身の回りに様々な人がいることを知り、徐々に友だちとかかわって遊ぶ楽しさを味わう」、(9)に保育士を仲立ちとして生活や遊びの中で言葉のやりとりを楽しむ」、(11)には「保育士の仲立ちによって、共同の遊具などを使って遊ぶ」、そして(14)(16)(17)には、ごっこ遊びや音楽、体を使って遊ぶ遊び等を保育士と一緒に楽しむことが示されている。

2歳児の保育は、子どもが周囲に興味関心を向け始め、子ども同士の関わりが始まり、ともに遊ぶことが可能になる時期と示されている。保育士の役割は、子どもと子どもの間を仲立ちすることと示されており、仲立ちとは一人の子どもと他児を媒介する関わりとして成立するものである。これらの表記から、保育士の役割が集団活動を主導するものと解釈することはむしろ困難でさえある。

2009年施行の保育所保育指針は、告示化に伴って大綱化されたため、保育の内容が年齢ごとには示されず、「第3章保育の内容」の「2保育の実施上の配慮事項」において(3)の「3歳未満児の保育に関わる配慮事項」として明記されている。そこには、「ウ 探索活動が十分できるように、事故防止に努めながら活動しやすい環境を整え、全身を使う遊びなど様々な遊びを取り入れること」「エ 子どもの自我の育ちを見守り、その気持ちを受け止めるとともに、保育士等が仲立ちとなって、友だちの気持ちや友だちとの関わり方を丁寧に伝えていくこと。」と、示されている。ここでも、子どもの自主的な遊びが重視され、保育士には一人の子どもと他児を媒介する役割が求められている。大綱化されているとはいえ、こうした表記が保育士による子ども集団の遊びの主導を示唆すると解釈することは困難である。探索活動は正に個人の活動である。1歳から3歳前という自

己主張の強まる時期には、少人数であっても子ども同士の関わりに際しては、大人の介在が必要とされることが明記されている。少なくとも、保育所保育指針には3歳未満児に集団活動を求める記述はない。そもそも0歳から2歳の子どもを対象として保育士が主導する集団活動が適切な保育方法といえる根拠もない。

こうした志向がいつから始まったのか、何に端を発するのか、興味深いところではある。1965年のソビエトにおいては、小グループでの課業は生後2年から行われていたが、少人数で行われることが大前提とされていた。さらに、大人主導の教授的遊びを全グループ一斉に行うべきではないと示されている⁴⁾。同時期に我が国の月間保育雑誌に掲載された2歳児の保育記録を見ると、保育者はクラスの子どもみんなが興味を持つような経験を用意し、みんなが参加できる場を設けることに力を注ぐ。子どもに課せられた課題は、集団活動に入ることであると記されている。1960年代の保育所における3歳未満児の保育に、集団志向が存在したことが窺える記述である。

1965年公布の保育所保育指針には、第1章総則2保育内容の基本方針3保育の基本方針に〈集団活動〉として(6)「子どもの年齢が低いほど、個別的な扱いをするよう配慮すること」と示されている。さらに、第4章1歳3か月から2歳までの幼児の保育内容では、冒頭の1発達上の主な特徴に、「他の子どもと協同して行動することはまだ困難である。」と、はっきり示されている。2歳児の保育内容を見ると、発達上の主な特徴として「同じ年齢の子どもに対して関心があり、いっしょにいることを好むが、協調して遊ぶことができず、自分の思う通りに遊ぶことが多い。」と示されており、子ども相互の間にトラブルが生じやすいことと「保母とのふれあいを求め、それが満たされていると安定した行動をとる。」ことが明記されている。保育のねらいの1つに「(4)保母が仲立ちとなって、生活や遊びの中で言葉のやりとりを楽しむようにさせる。」と挙げられた。

保育所保育指針が、個の活動を重視する内容を示す一方で、現実の保育では「みんなで一緒に」という集団活動を志向する。ここに1965年版保育所保育指針と現実の保育実践の乖離が窺える。これは、1960年代のみの現象ではない。保育図書に示された遊びの集団志向の高い割合と2009年施行保育所保育指針との間にも、同様の乖離が認められた。

増田らが2013年度に実施した調査では、3歳未満児の保育では子どもの年齢が上がるに伴い、保育士の意識は「集団で活動することの楽しさ」を重視する傾向がより高くなることが明らかにされた⁵⁾。1960年代に見られた「みんなで一緒に」という保育者の志向が、2009年の保育所保育指針施行以降にも認められ、さらに2013年時点においても認められたということは、大変興味深い現象である。

(2) 遊びの主導権・遊びの主体としてみる3歳未満児

保育図書に示された子ども主導の遊びでは、1歳・2歳ともに「子ども主導で個人遊び」が2009年以降に著しい減少が認められ、2歳では「子ども主導で集団志向」にも同様の傾向が認められた。既述のとおり、保育所保育指針では、改訂前・改定後ともに子どもの自主性や主体性が重視されている。特に改定後、保育図書から「子ども主導」の遊びが減少するという現象は、非常に興味深い。

小林はカイヨワの遊びの定義を解説する中で、遊びとは、他者から強制されるものではなく、自分自身が自発的に行うものであり、遊びはその活動自体が目的であると述べる⁶⁾。3歳未満の子どもにとっても、遊びは子ども自身の興味関心から始まる自発的な活動であり、子ども自身が抱く遊びの目的は「遊ぶこと」そのものである。集団活動では、

個人の興味関心を集団活動の目的に従属させることが求められる。3歳未満児にそれを求めることは時期尚早であり、集団活動は子どもの目的にはなり得ない。

小川は遊びを「幼児自らの動機で自らの活動をそれ自体の活動を楽しむために引き起こすこと」と定義する。乳幼児期の発達はその自発的行動なしには成立しないことを大前提として、大人の役割は子どもに遊びを教えることではなく、子どもの自主的行動を生起するような状況を用意することと述べる⁷⁾。中坪は、子どもの主体的な遊びの原動力として好奇心の存在を挙げ、保育者による子どもの興味関心、心情、言動を観察・推察に基づく援助の重要性を示唆する⁸⁾。保育者が遊びを学びの手段として扱い、その活動や成果を重視し、子どもの好奇心とは無関係にクラス全員で活動を行ったり、計画に則った活動内容の遂行に固執したりすることが、結果的に子どもの主体的な遊びを阻害する可能性を危惧する。松本は、遊び仕立ての“させる”活動の増加が主体的に活動するという本来の遊びが軽視される現状を危惧し、子どもの主体的な遊びを支える困難を指摘する⁹⁾。中坪と松本の指摘は、主として3歳以上児（幼児）の保育を対象とする論である。既述のとおり、保育所保育指針改定後には、子ども主導型の遊びが減少する。中坪らの指摘は、おそらく3歳未満児の遊びにおいても該当するのではないか。

宮原は、外からの「賞」や「罰」が存在せずとも、ある環境において自ら行動を起こす「内発的動機づけ」は、子どもと環境の相互交渉の中から生じるものと述べる。子どもの自発的な行動、活動に対して環境からの応答を重視するのが「応答的保育」であり、保育者の役割は環境が子どもの能力や発達レベルから高い場合にその差を縮めることと示した¹⁰⁾。3歳未満児の遊びは、保育者に主導されることによって成立するものではなく、どんなに幼くとも子ども自身が興味関心を持った物に働きかけることから始まる主体的活動である。

保育所保育指針の大綱化によって、3歳未満児の保育に関する記述は減少した。それが図書を製作する側へ提供する情報の減少として機能してしまったのかもしれない。

（3）個人遊びの減少

個人遊びは大人主導のものも子ども主導のものも、改定前から改定後に著しく減少することが認められた。保育所保育指針は2008年の改定の際、大綱化された影響で年齢別の詳細な記述はなくなった。改訂とほぼ同時に公布された保育所保育指針解説書では、第2章子どもの発達や第3章保育の内容2保育の実施上の配慮事項（2）乳児保育に関わる配慮事項（3）3歳未満児の保育に関わる配慮事項に複数の項目を挙げて解説が行われているが、遊びに関する記述は改訂前のものに比べると多いとは言い難い。改訂前の保育指針には、3歳未満児の一人遊びの重要性が明記されていたことを考慮すると、保育所保育指針改定後の個人遊びの減少は、大綱化によって影響を受けた可能性も考え得る。

0歳児であっても、子どもが抱いた興味関心を契機に探索が始まる。つまり、子どもは自分の力で遊び始める。それは一人遊び以外の何物でもない。小林は2歳から4歳にかけて一人遊びから平行遊び、そして連合遊び・協働遊びへと変容していく子どもの遊びの発生機序を示した¹¹⁾。小林によると、連合遊びが発生する契機には、子どもが他の子どもと協調することが必要であり、2歳頃の模倣や相手の行動を補足する行動の芽生えがそれに該当する。2歳は並行遊びから連合遊びへと遊び方が大きく変容する時期である。大人と離れて一人で遊べるようになるのもこの頃である。2歳中盤以降は、大人と一緒に2～3人で遊ぶことが可能になる。2歳児の遊びの援助は、一人遊びから子どもが他児に

興味を示す際の保育者の介在が重要になる。0歳から1歳での一人遊びはその前段階としても重要な意味を持つ。それらの援助とは大人の主導によって成立するものではない。先述の宮原による保育者の役割は、一人遊びの援助の基本ともいえる。

3歳未満児の一人遊びでは、状態の見守りと観察による個々の子ども理解に基づき、個々に応じた適切な援助が必要となる。一人遊びが一定のプロセスを経て連合遊び、そして協働遊びへと発展することを見通し、発達に応じた援助が求められる。

5. まとめ

保育者から一定の支持を得ている実用図書に示された遊びの分析を通して、図書に示された遊びと保育所保育指針には、明らかな乖離が認められた。保育所保育指針が子どもの自主的・主体的活動として遊びを捉え、子ども一人ひとりの活動を重視する一方で、保育者が利用する図書は、集団志向と保育者による遊びの主導が多く示されていた。また、2008年の保育所保育指針の改定を境に、それらは明らかな増加傾向を示した。それは、保育所保育指針大綱化によって、3歳未満児の保育に関する記述が減少したことが影響している可能性も考えられた。中野は研究者と保育者が捉える「遊び」概念には乖離があることを指摘し、両者間の「遊び概念」が分裂状態にある可能性を示唆する¹²⁾。中野の懸念する「分裂」は、保育所保育指針と保育図書の乖離と符合する。

2017年3月末に改定・公布された保育所保育指針では、3歳未満児の保育内容に関する記述の充実が図られた結果として、乳児(1歳未満児)と1歳以上3歳未満児に区分し、第2章にそのねらいと内容が位置付けられた。遊びは個々の子どもの興味関心や好奇心といった内発的動機づけによって始まるものとして示されており、「みんなで一緒に」行う活動として扱われる記述は当然ながら皆無である。ここでは子どもの興味関心から始まる遊びを十分に楽しみ、遊びの中から他児への関心が向かうプロセスを援助することが保育士に求められる。そこでは遊びの主体である子どもがその主導権を持つ。

保育者が支持する遊び図書に現れた傾向は、「みんなで一緒に」という概念に収斂される。こうした保育図書を保育者が実用的と評価するならば、3歳未満児の興味関心に基づく主体的関与を遊びの基本とする保育所保育指針との乖離は明らかである。

保育図書は、保育者が保育実践の参考とするものであり、その専門性を向上させるための自己研鑽のツールともなる。そこでは、どのような図書を選ぶかという保育者の選択眼も試される。今後、専門知識を強化した保育士の図書選択の志向に注目したい。

本稿は保育者や保育図書そして出版社を揶揄したり、非を指摘したりすることを目的とするものではない。むしろ、保育実践の質の向上に大きく寄与する可能性を内包する。保育図書に示される遊びが保育理論に裏付けられること、そうした図書を保育者が実用的であると評価すること、それが車軸の両輪となって保育の質の向上が実現する。

2017年の保育所保育指針の改定を受け、保育図書には、3歳未満児一人ひとりがそれぞれの興味関心に応じて遊びに取り組む姿や、それを肯定するモデルとなる保育者の援助を提示することが求められる。一人遊びを保障する保育者モデルやそのスキル、連合遊びへの移行期の援助モデルの提示である。今後の保育図書への期待は大きい。

引用文献

- 1) 岡本康：保育図書がなぜ売れる、日販通信（842）、pp.30-33、2009
- 2) 福井晴子：幼児の折り紙遊びを支援する保育図書の望ましい在り方、乳幼児教育学研究（12）、日本乳幼児教育学会、pp.89-98、2003
- 3) 西村真実：保育図書に示された3歳未満児の遊びと保育に関する考察、帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要(2)、帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター、pp.59-68、2017
- 4) クプリーノワ著山本斌・森下はるみ訳：集団乳児保育の実際3歳までの遊びと課業、新読書社、pp.10、1976
- 5) 増田まゆみ：保育形態の多様性と質に関する研究報告書、平成25～27年度東京家政大学大学間連携等による共同研究、pp.101、2016
- 6) 小林真：第9章遊戯行動（遊び）の発達、堀野緑、宮下一博、浜口佳和（編著）、子どものパーソナリティと社会性の発達、北大路書房、pp.130、2000
- 7) 小川博久：遊び保育論、萌文書林、pp.48、2010
- 8) 中坪史典：子どもの主体的な遊びの特徴とそれが引き出される背景、発達152、pp.12-17、2017、ミネルヴァ書房
- 9) 松本信吾：子どもの主体的な遊びを支える保育者の役割とは、発達152、pp.56-61、2017、ミネルヴァ書房
- 10) 宮原英種・宮原和子：応答的保育の研究、ナカニシヤ出版、pp.345-348、2002
- 11) 小林真：第9章遊戯行動（遊び）の発達、堀野緑、宮下一博、浜口佳和（編著）、子どものパーソナリティと社会性の発達、北大路書房、pp.134、2000
- 12) 中野茂：遊び研究の展望、小山高正・田中みどり・福田きよみ編、遊びの保育発達学、川島書店、pp.1-18、2014